

## 初めての「古本まつり」

林 康 代

### 1. はじめに

平成29年2月21日、22日の2日間、信州大学附属図書館中央図書館（以下、中央図書館という。）で除却した古本を1冊100円で販売する「古本まつり」を行った。このような古本販売は、すでに他大学で実施されていたが、信州大学では初の試みであった。以下は、「古本まつり」開催の経緯や当日の様子、雑感などを記したものである。

### 2. 再利用の機会をもう一度

資料の置き場所の不足に困っている図書館は多いと思う。中央図書館も例外ではない。購入や寄贈などで蔵書は日々増えていくが、スペースは限られている。資料を保存する一方で、スペースを確保するために、必要性が低い資料は、減らしていかざるを得ない。

資産として管理する図書館の資料を、管理台帳から削除（除籍）し、処分することを「除却」と言っている。平成16年の法人化以降、信州大学附属図書館で除却を行う頻度は増え、今では主要な業務の一つとなった。

中央図書館の除却は、基本的に次の①～⑥の手順で進められる。

① 除却対象の資料を、図書館員がリストアップする。

除却対象にできる資料は、内規で定められており、主として、同じ資料が複数ある場合（複本とっている。）、又は内容が古くなったり、破損・汚損した場合で、保存の必要がないと判断される資料である。リストアップされた資料の大半は、複本によるものである。授業の参考図書として複数購入したが、時が経って使用頻度が減った複本や、教員が研究費で購入し研究室で使用していた資料が、退職時などに図書館に返却され、館内にあった蔵書と重複して生じた複本が多い。

② 中央図書館運営会議で除却の承認を得る。

信州大学は、県内5ヶ所にキャンパスが点在し、各キャンパスに図書館がある。中央図書館は松本市にあるキャンパスの中にある。中央図書館に関する様々な案件は、キャンパス内の人文学部、経法学部、理学部、全学教育機構から選出された図書委員（教員1名）で構成される中央図書館運営会議で審議される。リストアップした資料の除却も、

この会議で承認を得る。

- ③ 学内の教職員に、除却承認された資料の利用希望があるか照会する。

本部の広報室から全キャンパスの教職員に配信される『週刊信大』という学内のメールマガジンがあり、そこに除却資料の照会記事を掲載してもらう。利用希望の申出があれば、所在変更の手続きをし、希望者へ渡す。

- ④ 他大学の図書館に利用希望を照会する。

学内での利用希望がなかった資料は、ほぼ全国の国立大学法人の図書館に、メールで照会する。あわせて、長野県内の大学・短大に照会する場合もある。利用希望があった資料は、無償で譲渡する。

- ⑤ 古書店に買取りを照会する。

他大学図書館で利用希望がなかった資料は、複数の古書店に買取りを照会し、希望があれば売る。

- ⑥ 古紙回収に出す。

古書店の買取り希望がなかった資料は、古紙回収に出す。

私自身が携わってきた除却では、上記の手順で、⑥の古紙回収に出す資料の数が最も多く、その次は③、④の学内や他大学での再利用、一番少ないのは、⑤の古書店の買取りであった。学内や他大学での再利用がそれほど多くないのは、除却リストは数千冊に及ぶこともあり、利用するか検討するにも時間や労力がかかること、そして、どこでも資料の置き場所に窮しているのではないかと推察する。

また、古書店の買取りが少ないのは、除却した本に「信州大学附属図書館」などの蔵書印があれば、その上に「消印」又は「廃棄」印などを押しているが、このような印が敬遠されることもあるようだ。

再利用や買取りの希望がなかった古紙回収行きの資料の中には、古びてはいるが廃棄するにはもったいない、まだ使えそうな本もある。他大学では、学生、教職員、一般市民を対象に、除却資料の無償譲渡や販売を行っている大学がある。そのような現物を直接見て選ぶ機会があれば、再利用される本も増えるだろう。

中央図書館は、平成25年から27年にかけて耐震・機能改修と増改築を行った。そのなかで、改修前に運び出した本を再び書庫に入れ込む際、書庫のスペースに余裕が無くなったため、(特に文学の分野と事典・辞典類から)複本を抜き出して除却することにした。その時の複本が上記の手順をたどり、古紙回収に出す状態となっていた。古紙回収に出す前に、他大学のように除却資料の無償譲渡か販売を行い、もう一度再利用の機会を作りたい。物がなかなか捨てられない私自身の性格も多分に影響し、その可能性を模索し始めた。それから「古本まつり」の実施までに約2年かかった。この間、これらの本を置いておくため、書庫のスペースを占領してしまい、大分迷惑をかけてしまった。

### 3. 販売承認までの過程

#### (1) 他大学の実施状況

まずは、どの程度の数の大学が、どのように実施しているか調査した。基本的に会計制度が同じである国立大学法人を調査対象とし、図書館のホームページなどを見て、無償譲渡や販売に関する記事がないかチェックした。この方法は、見落としなどの可能性があり、あまり適切なやり方ではないと思うが、おおよその状況は掴むことができたと思う。ホームページを一通り当たったところ、無償譲渡を行っている大学は案外多かった。古本市やリユースセールなどのイベントを実施しているところもあれば、リサイクルコーナーを設け、「ご自由にお持ち帰りください。」という方法を採用している大学もあった。譲渡に比べて、販売を行っている大学は少なかった。

#### (2) 無償譲渡か販売か

資料の再利用から言うと、無償譲渡でも販売でもよいのであるが、信州大学で行うとしたら、どちらがよいか？判断するにあたって、もう少し情報が必要だった。販売を行っている数大学に、なぜ（無償譲渡ではなく）販売をしているのかをメールで尋ねてみた。回答は、資料の有効利用、地域貢献、大学のPR、規程で売払うことになっているから、少しでも収入があったほうがよいから、などであった。この中で、規程で売払うことになっているから、という回答で気付かされたことがあった。信州大学の図書管理規程でも、除却した図書を売払うことができると定めている。規程には売払先の指定はないので（今までは古書店だけであったが）個人に売払ってもいいはずだ。そして、個人へ販売することも売払いなのだ、と改めて認識した。

販売のメリット、デメリットについても尋ねた。

##### (メリット)

- ・大学の収入となり、売払代金が予算配分されるため、図書の有効活用が図れる。
- ・当該事業を、ホームページやポスター等で学内外に周知することにより、大学のPRになる。
- ・地域貢献の一助となる。
- ・売却した収益が、学生用図書の購入費用に充てられる。
- ・処分されるはずだった資料の多くが、学生等に再利用されている。

##### (デメリット)

- ・当該事業の準備に、時間と労力を要する。
- ・一時は大量の図書を販売していたので、職員の作業量もかなりの分量があり、業務コストが一番大きかった。けれども、近年は数量が減ってきたことや、業務フローが確立し

一チン化したことで、負担感は軽減されてきた。

- ・リユースセールの間中に、人手をとられる。
- ・館内に余分なスペースがなく、リユースセールまでの除籍図書の保存場所や、セールを行う場所の確保に苦勞する。

以上のような回答があった。メリット、デメリットで挙げられたことは、無償譲渡を行った場合にも当てはまりそうだが、販売の場合にだけ言えるメリットは、収入があり、それを新たな資料の購入費等に充てられることだろう。

### (3) 会計的には大丈夫か

他大学の調査から、無償譲渡や販売を実施している国立大学法人の図書館は、数多くあることが分かった。次に、信州大学でも個人への無償譲渡、販売が実施できるか、会計的な問題はないか、財務部に尋ねた。無償譲渡については、図書管理規程に「譲渡」の条項があり、国、地方公共団体、大学、教育研究施設等に無償で譲渡できると定められている。この規定に基づき、これまで他大学へ除却資料の譲渡を行ってきたと思うが、譲渡先に挙げられているのは、団体など大きな組織だけなので、個人への譲渡が可能なのか気になっていた。

財務部に相談した結果、個人への譲渡を行う場合は、規程の改正が必要だろうとの見解だった。販売のほうは、妥当な販売価格の設定が厄介であるが、実施は可能のようだった。

### (4) 図書館内での話し合い

以前から除却資料の譲渡か販売を実施してみたいと話してはいたが、他大学の実施状況や財務部の回答を報告できる状態になったので、改めて中央図書館内の主査以上の役職(事務方)による打合せ(以下、連絡会という。)で、調査した結果を伝え、現状の規程では譲渡は無理のようなので、販売の実施を提案した。メンバーからは、図書管理規程で定める「譲渡」は、除却後の「譲渡」ではないので、規程改正の必要はないのではないか、との意見が出た。これは直ぐに解決できる問題ではなかったもので、とりあえず規程改正の可否は置いておき、単純に譲渡か販売を選ぶとしたら、どちらがよいか意見を出し合った。最終的に「少しでも収入があったほうがよい。」という意見で落ち着き、販売実施の方向で決まった。

また、他大学のデメリットに挙げられているように、業務量の増加が一番の懸念材料であった。よって、今回は試行とし、費用対効果を検証した上で、継続して実施するか検討することにした。

### (5) 販売価格の設定

財務部に、販売を行いたいとの意向を伝え、改めて実施できるか尋ねた。財務部の担当は、資産管理グループで、販売可能な根拠となる規定を示し、必要な手続を検討し、表にまとめて提示してくれた。このおかげで、霧が晴れて道が開けるように、販売実施までの見通しがつき、その後の作業が順調に進んだ。

まずクリアすべき問題は、適正な販売価格の設定だった。他大学では、おおむね1冊100円で販売しており、それに倣えばよいと思っていたが、学内で販売の承認を得るには、100円が妥当である理由、根拠が求められた。資産管理グループから、他大学の価格設定を調査してほしいとの依頼があり、以前の調査で協力いただいた大学に、もう一度尋ねることにした。そして、100円にした理由について、以下の回答をもらった。

- ・古書店での販売価格の相場
- ・学内者・地域住民へのサービスとなる求めやすい価格
- ・販売時に釣銭が生じない効率性

なお、図書館で購入した時の価格が高額だった場合、100円以上で販売している大学もあった。一方、状態が良くない文庫本は、50円にしている大学もあった。

回答を受けて思ったことは、この古本販売は、学生や教職員、一般市民へのサービスとなる特売セールという側面もあるということだった。

それから、中央図書館で販売予定の本について、100円以上の価格設定も考えてみたが、総じて購入後かなりの年月が経ち、経年相応に古びていたので、今回はその必要を感じなかった。また、文庫本は見当たらなかったため、100円以下の設定も必要ないだろうと思った。

資産管理グループに、他大学の調査結果を伝えた。そして、この調査結果を100円の根拠として、売払（販売）手続を依頼する文書を作成し、資産管理グループに送付した。そこには、販売対象の本は、古書店の買取希望がなく、売れなかった本であり、それらを有効活用するための販売であることも記載した。

その後、資産管理グループで必要な手続を進めてくれた。そして、数日後、無事に販売が承認された。

## 4. 販売の準備

### (1) 領収書

会計的なことで、もう一つ問題だったのは、領収書のことだった。規程上、販売時には領収書を発行しないといけない。通常使用している領収書は、手書きの複写タイプである。購入者が多い時は、手書き領収書は大変であるし、書き損じた時の訂正も面倒だ。農学部で行っている野菜やジャムなどの生産物販売では、レジスターが使われている。図書館で

も申請すれば、レジスターを使用できるとのこと。しかし、大学に予備はないので、レジスターは図書館で購入しなければならない。手書き領収書か、レジスターか、どちらにするか実際に会計を担当する図書館の総務係で検討してもらった。その結果、購入者は、それほど多くはないだろうとの予想で、今回は手書き領収書を使うことになった。

## (2) 販売対象の本

再利用や買取りの希望がなかった資料の中で、破損や汚損の程度が激しいもの、カビが付いているものなどは、除いて古紙回収に出した。さらに、図書館の蔵書目録や論文の書誌を調べる資料など、今はインターネットで検索可能な二次資料も、もはや利用される見込みはないと判断し、古紙回収に出した。そのほか、全巻揃っていないかたり、発行後に相当の年月が経過し、今も利用価値があるのか分からない辞書類なども、古紙回収に出すか迷ったが、ひとまず大半は残しておいた。

最終的に残った販売対象の本は、約1,400冊となった。傷みや染みがあり、状態があまり良くない本も多かった。主なジャンルは、日本の古典や現代文学、外国文学、哲学などの全集、個人全集、百科事典、語学辞典、その他各種の辞書類（例えば生物学辞典など）であった。文学全集の背表紙には、(私の知識不足のせいであるが)聞いたことがない作家の名も多かった。全集といっても抜けている巻はたくさんあり、全巻揃っているのは4、5セットくらいで、そのうち『鷗外全集』、『荷風全集』は状態も良好で、目玉商品になった。百科事典は全て旧版で2、3セットあり、そのうち状態が良いのは、1セットだった。しかし、百科事典は置き場所をとるので、なかなか買手は現れないだろうと思った。

## (3) 短冊方式

最も厄介な問題だったのは、図書館の内規で、除却した資料をどのように処分したかを図書館長に報告するよう定められており、その書類を作成するため、販売冊数だけでなく、どの本が売れたかを特定しなければいけないことだった。また、図書館で資料を購入した時が、国立大学法人化の前か後かで、資産を減らす会計伝票の処理を分ける必要もあった。

この問題について、連絡会の席で、市販の本に挟まれているスリップのように、本の書名や管理番号を記した短冊を作って本に挟んだらどうか（そして売れた時に短冊を抜き取る）という提案があった。手間がかかりそうであったが、他に適当な方法も思い浮かばなかったもので、この短冊方式でやってみることにした。

## (4) 広報

販売が承認されたのが平成29年1月末頃で、実施は翌月の2月21、22日の2日間、中央図書館1階の展示コーナーで行うことにした。春季休業中で学生が少ない時期だった

が、年度内に実施するには、入試日程等の関係で、その辺りが都合が良かった。イベント名は、他大学となるべく被らず、古本販売であることが分かり易いもの、などの点から「古本まつり」とした。販売対象者は、学生、教職員、一般市民、つまり誰でも OK にした。

2月に入り、「古本まつり」の開催について、『週刊信大』への掲載と報道機関への情報提供を、広報室に依頼した。あわせて、ホームページ、図書館のツイッター、ビラの掲示、学生向け電子掲示板で広報した。

ちょうど同じ頃、中央図書館では、春季休業中に閲覧室を勉強の場として中高生に開放し、信大生の気分を味わってもらう「ミライの信大生 応援プロジェクト」を行っていた。そのため、「ミライの信大生」の取材に来館した新聞社に、「古本まつり」も併せて取材してもらうことができた。

開催前に取材を受けたのは、地元の新聞社など3社ほどだった。記者の方は、直ぐ「古本まつり」の趣旨を理解してくれた。そして、「貴重なものはありますか。」などの質問をされた。「既に絶版となっていて、入手が難しい本があれば、それは貴重かもしれない。」と答えると、「どの本がそうですか？」とさらに突っ込んだ質問をされ、答えに窮する場面もあった。後日、各社の紙面に掲載された記事を読むと、要領よく簡潔にまとめられていて感心した。

## (5) 設営

開催日の前日に、十数名の職員で会場の設営をした。閲覧机やブックトラック、ブックシェルフを使って約1,400冊を並べた。会場の図書館1階展示コーナーは部屋ではないので、ブックトラックなどで会場のスペースを区切った。大まかに文学関係と事典・辞書類に分けて並べた。目玉商品は、目立つように置いた。

全巻揃っている全集や事典などは、セット販売にすべきか迷った。セットのうち、例えばある1巻だけ先に売れた場合、残りの巻は売れない可能性もある。けれども、今回は初めての販売で、ニーズもよく分からないので、「セット購入をお勧めします。」又は「全〇巻」などと記載したカードを添えておくにとどめた。

会計窓口は、処理の都合上、会場内ではなく、少し離れた図書館入口のカウンターに設けた。会計の手順は、まず「購入申込書」を記入してもらう。「購入申込書」は、氏名（領収書の宛名に必要なため。）と購入冊数の記入欄があり、その下は今後の参考にするため、学生、教職員、学外者の区別と「古本まつり」を何で知ったか、を任意で記入してもらうアンケートになっていた。会場の担当者は、「購入申込書」に記載された購入冊数と現物の冊数を照合した後、会計担当者への連絡ベルを押し、会計窓口を案内する。会計担当者は、連絡ベルが鳴ったらカウンターに出向き、「購入申込書」と代金を受け取り、手書きの領収書を発行する。領収書等は、総務係で手はずを整えてくれた。

## (6) 整理券

開催日が間近に迫った連絡会で、「整理券を準備しておいたほうがよいのではないか。」という意見があった。

「整理券？」

春季休業中で、キャンパスの学生もまばらである。地元の新聞に記事は掲載されたが、足を運んでくれる地域住民は、それほど多くないだろうと思っていた。おそらく会場は、閑古鳥が鳴いているだろう。そうしたら、会場担当の職員が、担当業務の合間に別の仕事もできるようパソコンを用意しておいたほうがよいだろうか、そのような心配をしていたので、整理券の話に意表を突かれた。ところが、驚いたことに、整理券を準備しておいて無駄ではなかった。

開催日まで、学外の方から図書館の場所などの問い合わせが電話で何件かあった。前日の会場設営が終わった後、「ちょっと中を見てもいいですか。」と下見をする学生が数名いた。夕方になって、明日テレビ局が取材に来ることを聞いた。「テレビ局が来る？」なぜだろうと思った。よほど取材のネタがないのだろうか。何となく異変を感じた。

## 5. 開催日の様子

当日は、8時45分の開館時から、ぽつぽつと来場者が会場前に集まり始め、開始前には約60名になった。整理券を配り、番号順に並んでもらったので、入口付近の混雑が避けられた。

開場の前に、購入方法の説明と（テレビ局も来館していたので）取材が入っていることを伝えた。

午前10時開場、番号順に入場してもらい、それからは、てんやわんやであった。当初予定していた会場担当者1名だけでは当然手が足りず、何人もの職員で対応した。

会場の隅に準備されたスーパーの買い物カゴを持って、本を選んでいる人もいた。「本の持ち帰り用の袋をご持参ください。」と、ビラ等書き添えていたが、セット購入の場合などは、予備に用意されていた段ボール箱が役に立った。

購入申込書を記入してもらっている間に、本に挟んであった短冊を抜き取った。抜き取った短冊を1時間ごとに集計した結果、開始から1時間で436冊が売れた。目玉商品も早々と無くなった。

午後になっても来場者は途絶えなかった。会場担当者用のパソコンの手配は、杞憂だった。逆に1人では手が足りず、応援が必要な場合もしばしばあった。当初は、会場を一見して、直ぐに帰ってしまう人も多いのではないかと思っていたが、会計担当者への連絡ベルも頻繁に鳴った。この予想外の状況に、夢を見ているのではないかと思う瞬間もあった。

そして、状態が良くない本や古紙回収に出すか迷った辞典類、文学全集の耳慣れない作家の巻なども売れていくのを見て、少なからず驚いた。蓼食う虫も好き好きといっちは語弊があるが、様々なニーズがあるのだと感慨にひたった。

広報室では、開催状況取材し、早速「信大公式 facebook」に載せてくれた。これを見て、2日目に訪れた学生や教職員もいた。

テレビ局は3社の取材が入り、夕方のニュースで初日の様子が報道された。そのうち、1社のニュースでは、百科事典が話題にのぼっていた。それは、取材の際にお薦めの本を尋ねられ、(目玉商品は販売済みだったので)全巻揃いの百科事典を紹介したためだ。おそらくこの放送を見て、翌日に百科事典を購入しに来てくれた方がいた。この方のほかにも、2日目はテレビの報道を見て来場した学外の方が多かった。

1日目に用意した本の半分近くが売れた。1日目の終了後、残った本を寄せ、空いたスペースを詰めて陳列場所を縮小した。初日から販売する本を全て並べたので、2日目に追加する分は無かった。中央図書館のツイッターで、本の追加はないことをツイートしてもらった。めぼしい本は、はけてしまい、さすがに2日目はもうあまり売れないだろうと思ったが、テレビ報道のおかげもあり、2日目も順調な売れ行きだった。



会場の様子（2日目）

## 6. 販売の結果

2日間の販売冊数は、次のとおりだった。

1日目：647冊（122人）

2日目：504冊（109人）

合計：1,151冊（231人）

※（ ）内は、購入者の延べ人数

販売冊数（1,151冊）は、用意した本の8割に及んだ。

そして、「購入申込書」のアンケート（任意記入）の集計結果は、次のとおりだった。

## ① 購入者の別（不明は未記入による。②も同様）

学外者（約43%）、学生（約29%）、教職員（約8%）、不明（約20%）

## ② 「古本まつり」を何で知ったか。（学外者、学生、教職員別）

（学外者）

新聞（約46%）、テレビ（約29%）、ホームページ・ツイッター（約7%）、  
口コミ等（約4%）、掲示物（約3%）、その他（約4%）、不明（約7%）

（学生）

掲示物（約43%）、ホームページ・ツイッター（約19%）、キャンパス情報システム（約12%）、  
口コミ等（約10%）、その他（約4%）、不明（約12%）

（教職員）

『週刊信大』（約30%）、掲示物（約20%）、テレビ（約10%）、来館時に知った（約10%）、  
その他（約10%）、不明（約20%）

以上の結果から、購入者は、新聞やテレビで「古本まつり」を知った学外者（一般市民）が多かったことが分かった。学生、教職員は少なかったが、開催日が春季休業中であったことも影響しているだろう。

また、「古本まつり」を何で知ったか、の回答にある「掲示物」は、主に中央図書館の掲示板上に貼ったビラで、そのほかは、松本キャンパスの生協の店舗に掲示を依頼したり、教職員が事務室に立ち寄った際などにビラを渡した。

## 7. 実施後の雑感

「古本まつり」がなぜ盛況だったのか、理由はよく分からない。1冊100円という求めやすい価格が要因だったのだろうか。初回ということで、ご祝儀相場的な賑わいだったのかもしれない。ホームページなどで見ると他大学の古本販売の様子は盛況であったが、信州大学でも同じ状況になるとは思ってもみなかった。このようなイベントは、どこでも好評なのかもしれない。

学外の方も大勢来館され、サービス担当者によると、図書館の利用方法についての問い合わせも多く、図書館が一般に開放されていることを広報する機会にもなったようだ。

このイベントを行う上で一番懸念されたのは、人的労力、業務コストがかかることだった。初回は、作業に費やす時間と労力は、かなりかかった。しかし、他大学の回答にもあるとおり、回を重ねれば業務フローも確立し、作業は効率化されていくだろう。けれども、ある程度効率化が進んでも、やはり売上げに比べれば、業務コストのほうが大きいだろうと思う。ただ、他大学でメリットに挙げられていた資料の有効活用・再利用、大学のPR、地域貢献などの効果は、今回の試行でも実感した。費用対効果の考え方は、いろいろあり、状況に応

じた総合的な判断になるのだと思う。

現段階で簡素化したほうがよいと思ったのは、販売した本を特定するために行った短冊方式だ。短冊を作って本に挟み込む作業、抜き取った後の集計、短冊を見ながら売れた本をリストに反映させる作業、(これらを図書係の6名で行ったが)どれも手間のかかる作業だった。そもそも、販売した資料をどの程度特定する必要があるか、についても検討の余地があるかもしれない。

もう一つ省力化できる点は、手書き領収書をレジスターに換えることだ。今回は予想外の購入者数に、発行作業は大変であったと思う。

何はともあれ「古本まつり」で多くの本が再利用された。願わくば、買ってよかったと思われる方が多ければ幸いである。

最後に、ご購入者はもちろん、「古本まつり」に御協力いただいた方々に感謝申し上げます。